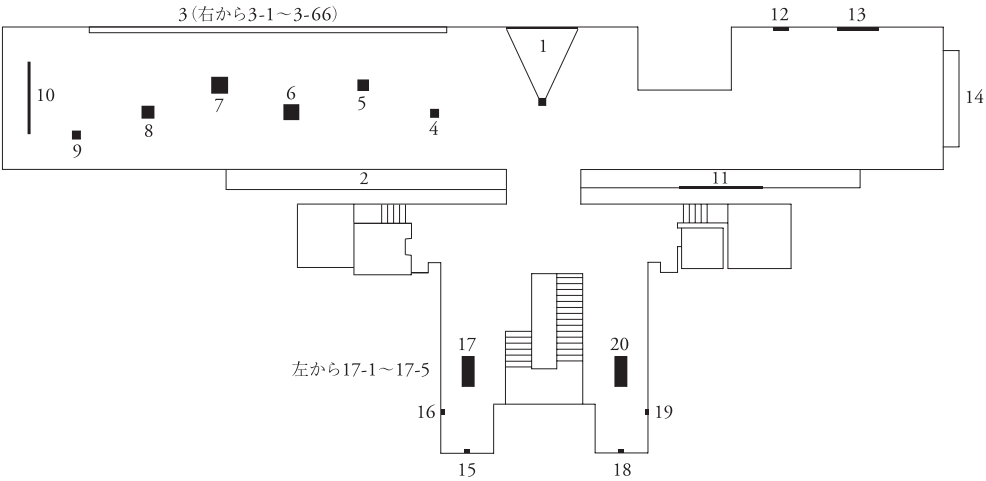
福田尚代　あわいのほとり

Naoyo Fukuda: At the Threshold's Edge



作品リスト｜List of Works

※作品の各項目を、番号、作品名、制作年、素材･技法、サイズ（縦×横×奥行cm）、所蔵の順に記載した。

1　あわいのほとり
At the Threshold's Edge
2025-2026
回文 / プロジェクション
Palindrome / Projection
作家蔵
Artist's collection

2　漂着物／波打ち際
Things Washed Ashore / Shoreline
2002-2026
消しゴムに彫刻、針、糸、紙
Sculpted erasers, needles, threads, paper
サイズ可変 / variable in size
作家蔵
Artist's collection

3　翼あるもの／岬
The Winged / Cape
2003-2025
頁を折り込まれた書物（66点）
Books with pages folded-in (set of 66)
サイズ可変 / variable in size
作家蔵
Artist's collection

4　書物の銀河（豆本三部作より）
Galaxy in the Book (from Trilogy of Miniature Books)
2009
本に刺繍
Embroidered book
21.5 × 14.5 × 1.5
個人蔵
Private Collection

5　花筏
Flower Raft / Helwingia japonica
2013, 2023
竹尺に彫刻
Sculpted bamboo ruler
サイズ可変 / variable in size
作家蔵
Artist's collection

6　本の粒子
Book Particles
2021
本の頁、糊
Book pages, glue
サイズ可変 / variable in size
作家蔵
Artist's collection

7　煙の骨
Bones of Smoke
2007-2013
女性の名前が刻印された色鉛筆の芯の彫刻
Sculptured leads of colored pencils engraved with women's names
サイズ可変 / variable in size
うらわ美術館
Urawa Art Museum

8　書物の魂 #02
Souls of Books #02
2013-2023
ほぐされた本の栞ひも
Crumbled built-in bookmark strings
サイズ可変 / variable in size
東京都現代美術館蔵
Museum of Contemporary Art Tokyo

9　100枚の毛布
The Hundred Blankets
2018
アズキとソラマメで染めたハンカチ、貝ボタン
Handkerchief dyed with adzuki beans and broad beans, shell button
8.5 × 8.5 × 9
個人蔵
Private Collection

10　アイスハーケン、そしてアイリス
An Ice Piton, and an Iris
2018-2024
脱色されたハンカチに刺繍
Embroidery on a bleached handkerchief
サイズ可変 / variable in size
個人蔵
Private Collection

11　不忍、蜘蛛の糸
Shinobazu – The Spider's Thread
1992
インク、アクリル絵具、パネル
Ink and acrylic on panel
183 × 430
東京都現代美術館蔵
Museum of Contemporary Art Tokyo

12　ひと粒の泡のなか
Inside a Particle of Foam
2023
少女漫画のコラージュ
Pages of girls' comics collaged on paper
36.4 × 51.5
個人蔵
Private Collection

13「髪の毛も、二つの目も、おどおどした頭も…」Ⅱ
"Till hair and eyes and timid head are out of sight, in heaven" Ⅱ
2013-2014
オイルパステルで塗り込められた少女漫画（7点）
Girls' comics painted with Oil pastel (set of 7)
15.5 × 11
作家蔵
Artist's collection

14　漂着物／ひとすくい／泉
Things Washed Ashore / A Spoonful of Salvation / Fountain
2024-2026
消しゴムに彫刻
Sculpted erasers
サイズ可変 / variable in size
作家蔵
Artist's collection

15　封筒 #01／1976年 冬／幼友達
（巡礼／郵便シリーズより）
Envelope #01 / Winter, 1976 / Childhood Friend (from Pilgrimage / Mail)
2009
郵便物に刺繍
Embroidered mail
19 × 18.5
個人蔵
Private Collection

16　便箋 #01／1981年 秋／先輩
（巡礼／郵便シリーズより）
Letter paper #01 / Fall, 1981 / My Senior
(from Pilgrimage / Mail)
2009
郵便物に刺繍
Embroidered mail
25.3×17.7
個人蔵
Private Collection

17-1　メッセージカード #01／スハラヤ
Message Card #01 / Suharaya
2025
メッセージカードに刺繍
Embroidered message card
6.3×5（二つ折り）
作家蔵
Artist's collection

17-2　メッセージカード#02／トランプ（ハートの2）
Message Card #02 / Trump Card (2 Hearts)
2025
メッセージカードに刺繍
Embroidered message card
6.2 ×5.2（二つ折り）
作家蔵
Artist's collection

17-3　メッセージカード #03 ／スミレ
Message Card #03 / Violet
2025
メッセージカードに刺繍
Embroidered message card
5.9×6.1（変形・二つ折り）
作家蔵
Artist's collection

17-4　メッセージカード #04 ／海水浴
Message Card #04 / Seaside bathing
2025
メッセージカードに刺繍
Embroidered message card
4.6×4.2（二つ折り）
作家蔵
Artist's collection

17-5　メッセージカード #05／クリスマス
Message Card #05 / Christmas
2025
メッセージカードに刺繍
Embroidered message card
6.4×5.1（二つ折り）
作家蔵
Artist's collection

18　夢ノート／袖の涙／泉 #01
Dream Note / Tears in Sleeve / Fountain #01
2023-2024
夢ノートに着彩（色鉛筆）
Colored pencil on paper (record of dreams)
21×14.8
個人蔵
Private Collection

19　海中の泉
Fountain in the Sea
2025
少女漫画のコラージュ
Pages of girls' comics collaged on paper
29.7×21
作家蔵
Artist's collection

20　袖の泉 #01
Sleeve Fountain #01
2025-2026
刺繍された喪服の袖
Embroidered sleeve of mourning attire
16×47
作家蔵
Artist's collection

「わたし」をつつみかえす
――――「あわいのほとり」に寄せて

朝木由香

福田尚代のなかで生と死はつねに往還している。此処と彼方は、寄せては返す波のごとく、たゆたい、もつれ、混じり合う。波打ち際で、波の揺らぎを見つめ続けるならば、踝を小さな渦が巻き、束の間、残像現象によって足元が潮に引き戻されるような錯覚に襲われる。そもそも、「わたし」が立つこの場所は、定まりのない、あいまいなものなのかもしれない。一瞬たりともとどまることのない水の流れに境がないように、此処と彼方の間に、果たして区切りなどあるのだろうか。「あわいのほとり」に佇む「わたし」は、内なる他者、もうひとりの「わたし」を探し求めるであろう。本稿はその漂流の旅を辿る試みである。

見ること

福田がしばしば自らの創作の根源として語る「わたし」。それは、幼い頃の記憶のなかの「わたし」である。庭は魂の住処、心をかこう小さな砦であった。ひとり佇み、「庭で地面をずっと見ていると、ものの境目がなくなって輪郭が揺らいでばらばらになって、粒の一粒、一粒が隣にある粒と入れ替わってみえることがあった」[1]という。

ここには何かを見る、といった日常的な物の見方に対する問いがある。ひたすら物を見つめ、凝視を重ね、存在を遡源する果てに、物の輪郭が消え、やがて姿、形のない小さな粒状の点が顕れる。互いの境目がない粒のひとつ、ひとつは、もはや何かであることから逃れ、揺らぎはじめるだろう。フレームのないこの特異な風景は、どこか不確かで不穏な気配に包まれている。だが、その純粋ゆえに混沌とした世界に潜り込み、散り散りになった事物の粒子をその手で触れ確かめることを、「わたし」は密かに誓ったにちがいない。その後、美術を志した福田は小さな点描を描きはじめる。「デッサンとは、形や構造など物質の存在を掌握するわざのように思われて、じつは、描けば描くほど存在の結び目が溶けてゆく術ではないだろうか。穴があくほど見つめながら事物を描いていると、地上的な枠組み、つまり輪郭が消え去る視覚の変容が訪れる」[2]と述べているように、この幼少期の原風景は、福田のなかに深く刻まれることになる。

停電

物の輪郭が消え、実在感が希薄になるに伴い、物と空間との結びつきもほどけてゆく。一瞬の現象においては、本来、人が何かを見るときの尺度となる遠さ、近さといった空間的な距離感が失われるからだ。福田はそのことをある「小さな停電」の体験を通して実感したのではないだろうか。

学生時代が終わる頃の出来事だった。「部屋が真っ暗になり、目の前の絵がパッと消えてしまった。その瞬間、わたしの内部にも停電が起こった。今まで見えていたものが見えなくなり、暗闇に向かって何千もの瞼がひらいてゆく感覚に襲われる。この得体の知れない闇の奥には何があるのか。その日を境に、行き先の見えない道を辿りはじめる」[3]と述懐している。あたかも、展望台から昼間には見えていた建物や窓の輪郭が、夜になると一切消え、夥しい数の光だけが点滅する夜景のようだ。だが、「停電」によって突如、対象との遠近感が消えた暗闇では、「わたし」が立つ位置さえ定まらない。そこでは手触りや音の響き、想像力の深さが求められるのではないか。以後、福田は「行き先の見えない道」にむかって、「何か」ではない、むしろ、「非在」を見るための隠れた符牒を探りはじめる。「言葉」――その小さな粒子の「言葉」は、「闇の奥」を確かめるための手がかりとなった。

《不忍、蜘蛛の糸》

《不忍、蜘蛛の糸》（no.11）は 1992 年、大学院の修了制作である。タイトルからは芥川龍之介の『蜘蛛の糸』で、釈迦が蓮池のほとりで地獄の底をのぞき見る光景などが想起される。その蓮池には作家が学生時代に親しんだ上野の不忍の池も映り込んでいるだろう。

なによりも、「蓮」という文字が、小さく書き込まれていることに目が奪われる。何十万もの文字が、縦183センチメートル、左右あわせて横幅430センチメートルのパネル一面にブルー、ブルーブラック、ブラックのインクで書かれ、延々と連なる。「蓮」の文字は近くに寄れば読めるものの、遠ざかるにつれて文字の線や形が消え、上下左右が混じり合った淡い色の帯となって、ぼんやりと浮かびあがる。凝視に耐えることで、非在が見えてくるという逆説を孕んでいるのだ。
パソコンで打った蓮の文字を「コピー・アンド・ペースト」して印刷することは一瞬で出来るが、本作の本質がその対極にあることは明らかだ。平安時代後期の「一字蓮台法華経」は、長い巻子に一字を一仏にみたて書写した経文である。文字の下に描かれた蓮台は、蓮弁の一枚、一枚が緑青や群青、朱、黄などで描き分けられ、そこに込められた篤い信仰ゆえに見る者に感動を与える[4]。この祈りは福田の文字のひとつ、ひとつにも宿っていると思われる。蓮池の深みに向かい、一心に手で文字を書き続けること。その所作は言葉を介して世界に触れようとする、原初の震えであった。

回文

大学院を修了後、福田はアメリカに渡る。1994年から約6年にわたる海外生活の間、次第に、いわゆる美術の制作から距離を置く一方、回文に傾倒し、2冊の回文集を私家版で出版するに至る。回文づくりは、その後も長短さまざまなものが生み出され、なかには星座や石、女性の名前だけを織り込むなど、より精緻なものへと展開している。本展のために書き下ろした回文「あわいのほとり」(no.1)は、近作とともにこのたびの作品集『あわいのほとりのひとり』(2026年、平凡社)に収められている。
回文とは、始めから読んでも、終わりから読んでも同じ文字列になるように配列した文章である。言葉を粒子のごとく、ひとつ、ひとつ解体して、並びの決まりに基づいて再構成する回文は、書き手が自由に言葉を選んで物語るものでも、組み立てるものでもない。むしろ、そうした制約や不自由さを引き受けることで、書き手である「わたし」の固有性を手放し、「わたし」という輪郭線を消す術を直感したのではないか。
福田が回文について「そもそもひとつの文章を双方向から同時に黙読するとき、脳裏にひびく声は二人となり、単語と単語の区切りも二重になって、目の前で文節がゆらぎつづける状態になる」[5]と述べていることにも注目したい。この「二重性」とは、回文の言葉が本質的に「同一」になり得ないことを示唆する。一つの回文のなかには、始まりと終わりからの二つの流れがあるからだ。この「二重性」は、言葉を発語する「わたし」自身の同一性にも揺さぶりをかけるだろう。こうした意識は、福田の私的な記憶から生まれる一見、内向で内密な作風と矛盾した印象を与えるかもしれない。だが、母国語の通じない未知なる土地で回文に没入するなかで、むしろ、「わたし」を解き放つ独自の糸口を見いだしたのではないか。

《漂着物》

帰国後、回文と併行しながら、再び、美術の制作に取り組みはじめる。書物や文房具、活字といった言葉にまつわるものを媒体とした一連の作品を、2003年のグループ展「Chaosmos'03 Mindscape」(佐倉市立美術館)などに発表して注目される。なかでも《漂着物》と題する消しゴムの作品は、その後も福田の創作世界の底流をなしている。いずれも消しゴムを素材に、削り、刻み、中をくり抜き、船や花弁、ベッド、椅子、墓石、手紙などの形に彫刻したものだ。福田は、展示ごとにその何百、何千個もの小さな消しゴムを床面にひとつ、ひとつ配置する。本展では、《漂着物／波打ち際》(no.2)と《漂着物／ひとすくい／泉》(no.14)が、展示室の壁に備えつけられた大小ふたつのガラスケースの中に、光の水場のごとく広がる。だが、その光景は一時的な現象に過ぎず、やがて片付けられ、跡形もなく消える運命にある。
消しゴムとは文字を消すたびに、それ自体が消し屑となって消えてゆくものだ。一般に、「消す」とは、消した後に姿、形が「消えずに残る」ことと対置される言葉だが、福田は、存在が「消滅した後」の名残や残滓を求めるのだろう。そう考えるな

らば、《漂着物》とは実在する物の像ではなく、既にこの世にはない記憶の残像なのだ。束の間、ひとつの場に遭遇した残像を前に、見る人は、物そのものを見るのではなく、物にまつわる記憶やかつての出来事に思いを馳せる。だが、個々に過ぎ去った記憶を語り直すことはできるのだろうか。たとえば、ジャコメッティは友の死に際し、さまざまに起きた事を円の図のなかに言葉にして位置づけようと試みるが挫折する。「私の物語全体の中で時間は現在から過去へと逆行していたが、しかも後戻りしたり途中から分岐したりしていた」[6]。翻るならば、記憶を思い起こすとは、過去、現在、未来の単線的な時間軸から逃れることではないか。

《翼あるもの》

《翼あるもの》も2002年前後より制作が続いており、本展では、《翼あるもの／岬》(no.3)と題した66点が並ぶ。いずれも作家が愛読する文庫本の頁を折り込んだもので、あたかも鳥が翼を広げた姿を思わせる。頁の一枚、一枚を折りたたんでいると「思いがけない言葉が立ち現れる」という[7]。たとえば、マルセル・プルースト『楽しみと日々』の「内面の月の光から目をそらすことができない。」や、スタニスワフ・レム『ソラリスの陽のもとに』の「数メートルもあると思えるその層を通して海の奥深い所が見えるようになりました。」……。これらの一行を残してすべての頁は折り込まれて読むことができない。では、これらは誰の言葉なのか。物語の流れから自立した言葉は、もはや登場人物の台詞でも、本の作者の語りでもない。あらゆる人称から解放された純粋な言葉となって、飛翔するのだ。

《巡礼》

本展には出品はないが、2010年のグループ展「アーティスト・ファイル 2010」(国立新美術館)[8]で発表した《巡礼／名刺》(2008-2010年)には、そうした人称、すなわち「わたし」のアイデンティティをめぐる独自の表現が認められる。いずれも名刺に印刷された文字のひとつ、ひとつの上に、白色系の淡い色の刺繍糸で極小の玉結びを施したもので、いわば名前の消えた名刺である。白い糸玉で飾られた名刺は、あたかも墓碑銘にうっすらと粉雪が積もったかのような静寂さを醸し出す。文字の線が糸の雪玉で消されるにつれ、「わたし」という輪郭線もこの世から消えてゆくのだろうか。そもそも、「わたし」の名前は、自分以外の他者によって名付けられものなのだ。そう気づいた途端、「わたし」というアイデンティティは揺らぎはじめる。

《巡礼／郵便》(2008-2010年)も、親しい人から送られた大切な手紙の一文字、一文字に、糸の玉結びで刺繍されたものだ。《封筒 #01／1976年 冬／幼友達》(no.15)と《郵便 #01／1981年 秋／先輩》(no.16)はいずれも幼い頃に福田に届いた手紙だ。また、《メッセージカード》(5点組)(no.17)のなかには、かつて送ったカードが長い月日を経て、再び手元に戻ってきたものがあるという。古い箪笥のなかで眠っていた記憶に再び巡り遭うような出来事だが、文字が刺繍で消されてしまった今、手紙にはうっすらとした皺やインクの沁み、手でさすった痕跡だけがある。

福田は郵便局に勤めたことがあり、「郵便局とは、あらゆる言葉がくりかえし集まっては霧散する、この宇宙そのものに思えてならない。」[9]と述べている。作家の手元に集まった手紙は、そこに書かれた文字も、年月を糸玉で消す――新たな「消印」を押すことで、わたしとあなた、わたしと彼、といった差出人と宛先人の間の固有な関係から解き放たれるに違いない。そして、誰のものでもあり、誰のものでもない手紙となって巡礼の旅を続けるのだ。

穴を穿つ

名刺や手紙だけでなく素描や本にも針穴が開けられる。穴は単一でなく、小さく、無数に穿たれることが特徴だ。穴を穿つという技法は、存在をめぐる福田独自の思索と深く結びついている。たとえば、先述した《巡礼／郵便》の手紙や、《書

物の銀河》(no.4)のような書物では、紙の裏から表へ針を刺し、次に表から裏へ、さらに裏から表へと針の向きを返しながら糸を通してゆく。だが、この針穴の往還が延々と反復されるならば、表と裏の境は次第にあいまいになり、両義的な関係が生まれるだろう。
一方、糸を通さず、ただ紙に針で穿孔した作品もある。たとえば2014年のグループ展「フラグメント── 未完のはじまり」(東京都現代美術館)に出品した《ランボーの手紙》(45点組、2013-2014年)は、同名の文庫本をばらし、それぞれの頁の一面に無数に針穴を打ったものだ。文字もノンブルもかすれ消え、紙片はフィルムのようにまくれる。穴を通って手前に差し込む光を糸に喩えるならば、その光の糸は、同時に奥へと吸い込まれてもゆくだろう。
穴を穿つことは福田にとって、点描を描くことにほかならない。「点を打つことは輪郭や境界を揺すぶることだ」[10]と述べるように、穴を穿つとは、あらゆる存在と非在の境を不確かにするための秘儀であり、互いが行き交う回路を開くことなのだ。敢えて言えば、この狭くて小さなところから此処と彼方が溶け合う────「あわいのほとり」が生まれるのだ。

あわいのほとりのひとり

穴を穿つことを福田独自の彫刻の流儀と呼ぶならば、紙を切り抜き、布を折り、ひもをほぐすといった技法も含まれるだろう。《書物の魂 #02》(no.8)は本の栞のひもを一本、一本、本から切り離し、色を洗い流した後に乾かして指先で丁寧にほぐしたものだ。10年もの時間のなかでゆっくりと変容したそれは、生まれつつ、消えゆく「あわい」に見える。
このように近年、福田の創作世界では、生と死がより豊かに触れあっている。《夢ノート／袖の涙／泉 #01》(no.18)には、《袖の涙》のシリーズの新たな展開が見られる。これは夢の記録をもとに描いたドローイングで、拭った涙をふくんで大きな滴のように膨らんだ喪服の片袖が、ほの白く光り、闇の中を浮遊する。生と死、夢と現実のあわいだろうか。《袖の泉 #01》(no.20)では、身体の片割れのごとく、切り取られた喪服の片袖そのものに、青や水色の糸で玉結びが施される。
さらに、《アイスハーケン、そしてアイリス》(no.10)は、脱色したハンカチに刺繍を重ねたもので、タイトルは氷雪用の楔であるアイスハーケンと植物のアイリス、さらにヘルマン・ヘッセの同名の短編による[11]。ハンカチの端を摘まんで吊るすと、それは半ば開き、半ば閉じた巻き貝のように、しなやかに回り出す。見上げると、布の表と裏、内と外の境目は襞のなかでつつみかえされて判然としない。だが、この生と死の境が消えた「あわいのほとり」を福田は探し求めてきたのではないだろうか。今、「ほとり」に佇む「ひとりのわたし」は、自らの手で、内なる他者、もうひとりの「わたし」をつつみかえすであろう。

注

1 「ことばのつみき── 福田尚代インタビュー」『あわいのほとりのひとり』平凡社、2026年、pp.120-121。
2 福田尚代「パンくず、涙、斜めからの光、もしくは詩的実体としての美術について」『わたしたち、言葉になって帰ってくる』私家版、2020年、p.46。
3 福田尚代「片糸の日々」『ひかり埃のきみ── 美術と回文』平凡社、2016年、p.185。
4 筆者が見た国宝「一字蓮台法華経」巻第三(龍興寺所蔵)による。
5 前掲注2、p.47。
6 ジャコメッティ「夢・スフィンクス楼・Tの死」『エクリ』みすず書房、2000年、p.85。
7 福田尚代「制作をめぐるノート」『福田尚代作品集 2001-2013 慈雨百合粒子』小出由紀子事務所、2014年、p.50。
8 同展については南雄介「福田尚代 回文と美術」『アーティスト・ファイル 2010── 現代の作家たち ファイル018:福田尚代』2010年、pp.2-4を参照のこと。
9 前掲注7、p.50。
10 前掲注1、p.126。
11 福田尚代「ひとすくい展インタビュー」[聞き手:小崎哲哉] Kanda & Oliveira、2024年7月20日。
https://www.kandaoliveira.com/ja/events/4-interview-naoyo-fukuda/

謝辞
本展の開催にあたり、多大なご協力を頂きました作家、福田尚代様をはじめ、関係各機関、美術館、所蔵家の皆様、お名前を記すことのできない関係者の方々に深甚なる感謝の意を表します。（敬称略）

福田尚代

うらわ美術館
公益財団法人 小笠原敏晶記念財団
Kanda & Oliveira
小出由紀子事務所
DIC 川村記念美術館
東京都現代美術館
YOKOTA TOKYO

植木智佳子　鎮西芳美
大田晃　鳥越貴樹
岡本想太郎　中沢英夫
柿沼裕朋　前田希世子
神田雄亮　松下憲史
小出達也　三瀬とも子
小出由紀子　山川久
下中順平　山田志麻子
髙橋健治　横田聡
高橋瑞穂　Polly Barton
滝口明子

［展覧会］
福田尚代　あわいのほとり
Naoyo Fukuda: At the Threshold's Edge

2026. 2.21（土）–5.17（日）
February 21(Sat) – May 17(Sun), 2026

神奈川県立近代美術館 鎌倉別館
主催：神奈川県立近代美術館

担当
朝木由香
髙嶋雄一郎
永井慧彦（広報）

［リーフレット］
編集
朝木由香（神奈川県立近代美術館）

デザイン
da. 下田理恵

制作印刷
株式会社瞬報社

発行
神奈川県立近代美術館
〒240-0111 神奈川県三浦郡葉山町一色2208-1

発行日
2026年2月21日

The Museum of Modern Art, Kamakura & Hayama
神奈川県立近代美術館 鎌倉別館
The Museum of Modern Art, Kamakura Annex